JAPAN／ICOMOS INFORMATION

第２期　第９号

平成5年（１９９３年）１０月３０日発行

もくじ

◎1992年日本イコモス国内員会総会
- 報告事項 …… 1
- 審議事項 …… 3
- 別紙資料 …… 5

◎1993年第一回理事会
- 報告事項 …… 8
- 審議事項 …… 11
- 別紙資料 …… 12

◎坪井清足委員長よりイコモス会長ローランド・シルヴァ氏への礼状 …… 17
◎ローランド・シルヴァ氏より坪井委員長への礼状 …… 18
◎コロンボ大会参加者報告
- 坪井清足　「ＩＣＯＭＯＳ第１０回総会」 …… 20
- 伊藤延男　「イコモス副会長当選の経緯について」 …… 21
- 上野邦一　「スリランカの遺跡保護」 …… 23
- 牛川喜幸　「イコモス・スリランカ総会に出席して」 …… 24
- 中村　一　「ギリシャの岩」 …… 25
- 西浦忠輝　「第１０回スリランカ総会に参加して」 …… 26
- 西村幸夫　「イコモス第十回総会に出席して」 …… 28
- 益田兼房　「第１０回イコモス・スリランカ総会の決議宣言」 …… 29
- 渡辺定夫　「スリランカ参り」 …… 31

◎日本イコモス国内委員会　会員名簿 …… 33

JAPAN/ICOMOS INFORMATION

第２期　第９号

平成５年１０月３０日　発行

諸報告

◎１９９２年
日本イコモス国内委員会総会

日　時：1993年 2月 8日（月）午後6:30～8:30

場　所：学士会館（神田一つ橋）307 号室

出席者：坪井清足委員長、稲垣栄三、伊藤延男、石井　昭、石澤良明、羽生修二
陣内秀信、益田兼房、渡辺保弘の各理事、大河直躬、川添智利、
近藤公夫、斎藤英俊、田中　琢、前野　嵓 、矢野和之の各委員
出席者計16名　委任状提出者60名　委員総数は129 名（1993年 2月8 日現在）で、委任状を含む出席者は過半数を超え、総会は成立（担当：渡辺保弘理事）。

議　事

Ⅰ　報告事項

１）1992年活動報告

ａ）事業報告（担当：稲垣理事）

①92年 2月　第一回研究会開催（於：学士会館）
「ブルガリアの文化遺産の保存」　リュドミラ・マルコヴァ氏

②92年 7月　第二回研究会開催（於：東京アメリカン・センター）
「アメリカに於ける文化遺産の保存」　シェリリン・ワイデル氏

③92年10月　講演会（主催：文化庁・京都市　於：国立京都国際会館）
「世界の文化遺産保護の状況について」　ヘンリー・クリア氏

④92年10月　講演会（主催：文化庁・日本イコモス国内委員会　於：文部省５階会議室）
「日本の文化財保護の印象について」　ヘンリー・クリア氏

⑤92年11月　シドニーに於けるICOMOS Advisory Committee （諮問委員会）に坪井委員長の代理として前野　嵓 委員出席

ｂ）広報報告（担当：益田理事）

①92年 2月　JAPAN ICOMOS INFORMATION第２期第７号を発行

②92年 4月　英文「世界遺産条約の履行のための作業指針」の日本語翻訳を文化庁に提出（文化庁委託業務）

③92年 8月　JAPAN ICOMOS INFORMATION第２期第８号を発行
同時発送：「世界遺産条約の履行のための作業指針」
「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」

c）庶務報告（担当：渡辺保弘理事）

①92年 1月　第一回理事会開催（於：学士会館）
②92年 2月　1991年イコモス国内委員会総会開催（於：学士会館）
③92年 3月　第一回コロンボ大会実行委員会開催（於：文化財工学研究所）
④92年 4月　第二回コロンボ大会実行委員会開催（　　〃　　）
⑤92年 4月　1992年分会費納入案内発送
⑥92年 5月　パリ本部へ1992年分会費（129 名分）送金
⑦92年 6月　第二回理事会開催（於：学士会館）
⑧92年11月　第三回理事会開催（於：学士会館）
⑨92年12月　1992年分会費納入案内（第二回目）発送

2）会員推移状況（担当：渡辺保弘理事）

1991年の会員数123 名、1992年入会者 6名にて総会時の会員数は129 名
入会：1991年総会承認に基ずく1992年入会の新規会員は以下の６名。

佐々波秀彦氏　国連地域開発センター所長
重枝　　豊氏　日本大学工学部建築学科研究生
日高健一郎氏　筑波大学芸術学系助教授
前野　　嶌氏　東京芸術大学美術学部建築学科教授
宮川　朝一氏　住宅都市整備公団都市開発部事業管理課参事
宗田　好史氏　国連地域開発センター研究員

3）会費納入状況（担当：石井理事・渡辺保弘理事）

1993年 1月30日現在の会費納入状況は（別紙Ⅰ）の通り。

4）会計報告（担当：渡辺保弘理事）

1993年 2月 8日現在，一般会計残高 2,347,893円、基金合計12,550,000円
詳細は（別紙Ⅱ）のとおりで、承認された。

5）会計監査報告（担当：大河直躬委員）

監事未定のため大河直躬委員が代理で監査，承認報告。

Ⅱ　審議事項

1）退会及び入会の件（担当：渡辺保弘理事）

①入会申込者：１名　（　）内は推薦者

アンドレ・アンシェイ・グルシェフスキー氏

京都大学防災研究所研究員　　（金田　潔委員・宗田好史委員）

同氏の入会が承認された。

②退会申し込み者（1992年一杯で退会を希望）

岩下敏也氏　元文化財保存協議会参与

沢村　仁氏　元九州芸術工科大学教授

両氏の退会が承認された。

③会員数：今総会時点での会員数は 129名、

なお、総会終了後に下記１名の方のご逝去があったため、今回添付の会員名簿の会員数は 126名。

土田直鎮氏（国立歴史民族博物館館長）　ご逝去

2）国際イコモス総会（於コロンボ）に対する活動計画の件（担当：稲垣理事）

①国際イコモス総会（以下「コロンボ大会」）のおり、日本イコモス国内委員会に割り当てられた発表、（ 7月31日9:30～10:00 「Presentation of the Heritage of Asia」）は西村幸夫理事が担当する。この発表については東京在住の有志の方々の協力が望まれる。

②イコモス総会において伊藤延男理事が副会長に立候補するため、その投票のためには最低４名がコロンボ大会に出席することが必要であるが、すでに坪井委員長、及び伊藤延男、西村幸夫の両理事が予定されている。当国内委員会では、基金の利息674,524 円を参加者人数で割り、それぞれに費用の補助を行う。

③アジアの途上国からのコロンボ大会参加者の参加費用の一部を当国内委員会で援助することはすでに決定しているが、この援助の方法や金額については、スリランカ・イコモスの意向をそのまま受け入れて援助することは好ましくない。従って、スリランカ・イコモスに再度問い合わせをし、日本の援助が明確にされるような形での協力が望ましい、という結論を得た。

④③のコロンボ大会参加者への援助のため、特別の募金を日本国内委員会で行う。１口１万円。会員各位の協力が期待される。

3）ICOMOS本部発行の NEWS LETTERの国内委員会編集の件

昨年１１月の Advisory Committee （於シドニー）の席上、日本は一回限り編集を引き受けることを申し出たが、この NEWS LETTER　の発行に関して、当国内委員会とパリ本部との間に意見の食い違いが見られる。本部からの要請によると編集は本部でなされ、それにかかる費用と原稿の一部のみを日本

で引き受けてほしいとのことであった。それについては坪井委員長と稲垣栄三副委員長に交渉を一任することとし、同時に費用の詳細を知らせるよう本部と交渉する。

4）「イコモス木造文化財保存特別国際委員会」日本開催について

１９９４年３月に日本国内で開催される予定である「イコモス木造文化財特別国際委員会」（木の委員会）を、日本国内委員会も支援することが決定した。

5）US／ICOMOSからの交換研修生制度の要請について

US/ICOMOS より交換研修生制度を検討されたいとの要請が日本国内委員会にあった。US/ICOMOS の提案する１２週間にも及ぶ研修生の受入れおよび宿舎の提供と交通費の支給は今の所不可能である。しかしこのような制度を実現することは、文化・環境の違いによって生じている修復に関する考え方の相違を欧米諸国に理解してもらう良い機会であるので、今後前向きに検討していきたい。また、個別に受入れ可能な組織があれば、当国内員会が窓口になって研修生を招聘することを考えたい。

6）予算計画について

1993年の予算計画については、（別紙Ⅲ）のように渡辺保弘担当理事より説明があり、承認された。

以　上

（別紙Ｉ）　会費納入状況　　1993年 1月30　日現在

	名誉会員数	会 員 数	納入者数	未納者数	（免除）
１９７９年分		２０	２０	０	０
８０年分		２０	２０	０	０
８１年分		３４	３４	０	０
８２年分		３４	３３	０	１
８３年分		３４	３３	０	１
８４年分		３３	３３	０	０
８５年分		４６	４６	０	０
８６年分		４７	４６	１	０
８７年分	４	４２	４０	１	１
８８年分	４	４１	３９	１	１
８９年分	４	９３	８８	５	０
９０年分	４	１１９	１１３	６	０
９１年分	３	１２１	１０５	１６	０
９２年分	３	１２６	９１	３５	０
９３年分前納	・	・・・	６	・・	・

以上の通り報告致します。

会計担当・石井　昭
渡辺保弘

1993年 2月 8日

（別紙Ⅱ）　会計報告　　自1992・2/13～至1993・2/3

繰　越　金		
普通預金（口座１）繰越	348,569 円	
普通預金（口座２）繰越	1,093,200 円	
合　　計		1,441,769円
収　　入		
1988年会費	10,000円× 1名＝ 10,000 円	
1989年会費	10,000円× 1名＝ 10,000 円	
1990年会費	10,000円× 5名＝ 50,000 円	
1991年会費	10,000円×21名＝210,000 円	
1992年会費	10,000円×91名＝910,000 円	
1993年会費	10,000円× 6名＝ 60,000 円	
定期預金（基金）利息（口座 1受入）	674,524 円	
普通預金（口座 1）利息	3,301 円	
普通預金（口座 2）利息	9,194 円	
文化庁委託業務費	414,600 円	
合　　計		2,351,619円
支　　出		
ICOMOS本部へ1992年会費129 名分	289,831 円	
1991年総会会場費	17,037 円	
理事会会場費他（ 2回）	8,755 円	
研究会会場費（ 2回）	33,829 円	
広報担当事務経費	195,235 円	
国際会議出席航空券	176,000 円	
〃　諸経費	69,035 円	
銀行振込手数料	2,060 円	
同時通訳費用（第２回研究会）	49,490 円	
翻訳料（世界遺産条約履行のための作業指針）	393,252 円	
世界遺産パンフレット（ユネスコより）	24,500 円	
会員証ネーム打ち	29,231 円	
会計・庶務担当事務費	157,340 円	
合　　計		1,445,495円
残　　高		
普通預金（口座１）	1,026,394 円	
普通預金（口座２）	1,321,499 円	
合　　計		2,347,893円
基　　金		
イコモス研究振興基金	12,550,000 円	12,550,000円

以上の通り報告致します。

1993年 2月 8日

会計担当・石井　昭
渡辺保弘

（別紙Ⅲ）　　イコモス国内委員会　1993年予算計画

会員数　129名（予定）

1992年繰越金	普通預金（口座１）繰越			1,026,394 円
	普通預金（口座２）繰越			1,321,499 円
収入	会費	1993年分	1,190,000 円	
		未納分徴収	650,000 円	
	利息	定期預金（基金）	500,000 円	
		普通預金	10,000 円	
	募金		1,000,000 円	
	合計			5,697,893 円
支出	会費	ICOMOS本部宛	300,000 円	
	総会会場費		20,000 円	
	理事会会場費		20,000 円	
	研究会会場費		30,000 円	
	広報担当経費		300,000 円	
	会計・庶務担当経費		240,000 円	
	コロンボ大会実行委員会活動経費		100,000 円	
	コロンボ大会参加者渡航援助費		650,000 円	
	コロンボ大会援助費		2,000,000 円	
	ICOMOS本部発行 News Letter出版経費		1,000,000 円	
	合計			4,560,000 円
残高				
	（普通預金）繰越金＋収入－支出			1,137,893 円

活動計画（概略）

総会開催	１回
理事会開催	５回
研究会開催	５回
インフォーメーション発行	３回

◎１９９３年第１回理事会

日　時：　１９９３年（平成５年）９月１０日（金）午後６時半～９時
会　場：　神田学士会館・３０６号室
出席者：　坪井清足委員長・稲垣栄三副委員長・伊藤延男・西村幸夫・
　　渡辺保弘の各理事

議　事

Ｉ報告事項

１）第１０回国際イコモス総会関係活動報告

第１０回国際イコモス総会はスリランカのコロンボにおいて１９９３年７月３０日から８月７日までの９日間に亘って開催された。この総会はアジアで初めて開かれるイコモスの総会であるため、アジア・オセアニア諸国に焦点をあてた発表セッションが総会の中心に据えられるなど、スリランカ・イコモスの総会主催に向けての気概はもとよりの事、同じアジア諸国の一員としての日本イコモスもアジアの途上国からの参加者への参加援助を行った。総会の様子については参加された各委員からの報告（20ページより）を参照されたい。

①参加者

坪井清足委員長・牛川喜幸副委員長・伊藤延男・西村幸夫・益田兼房の各理事・上野邦一・中村　一・西浦忠輝・渡辺定夫・の各委員

②発表者及び発表題目

西村幸夫理事　　「日本の文化財保護の現状について」
西浦忠輝委員　　「遺跡の保存・修復とそのための国際協力に関する調査・研究」
中村　一委員　　「文化財遺構整備に関する研究」

③アジア諸国の参加者参加費援助募金について

委員各位にご協力いただいた参加費援助募金は総額 990,000円（別紙Ｉ参照）国内委員会より皆様に深甚なる謝意を申し述べます。

④アジア諸国の参加者参加費援助の内訳

スリランカ・イコモスとの援助額・人選の度重なる折衝には石井理事がこれに当り、国内員会より総額 1,657,000円を参加援助費としてスリランカ・イコモスを通じて１１名の参加者（パキスタン３名、インド３名、中華人民共和国１名、ベトナム社会主義共和国１名、タイ１名、ネパール２名、）に支給。（別紙Ⅱ-a～c 参照）

⑤国内員会より総会参加者への渡航費援助について

総会に参加した伊藤延男・西村幸夫・益田兼房の各理事及び上野邦一・中村　一・西浦忠輝・渡辺定夫の各委員に各々 105,000円、総額 735,000円を（坪井清足委員長・牛川喜幸副委員長は辞退）支給。

⑥総会参加者報告

坪井委員長より総会の概要報告、西村理事より発表セッションでの報告、伊藤理事より本部役員改選選挙結果の報告があった。なお、この役員改選で伊藤理事は副委員長に立候補し、当選された。

⑦文化財保護振興財団よりの助成金について

財）文化財保護振興財団（理事長・石川六郎　住所：東京都中央区日本橋2-28-3中里ビル８階）より本総会に参加し、発表を担当された西村幸夫理事・中村　一委員・西浦忠輝委員の３名に渡航及び宿泊に対する助成金が交付された。１名につき 470,000円、計 1,410,000円。

２）会計中間報告

1993年 9月 8日現在の一般会計残高　1,334,238 円、基金 12,550,000 円

詳細は（別紙Ⅲ）の通り

３）「イコモス木造文化財保存特別国際委員会」関係報告

伊藤理事より1994年に開催予定の「イコモス木造文化財保存特別国際委員会」（「木の委員会」）について以下の報告があった。

①目　的

ａ）事業目的

木造文化財建造物に関する国際的な専門家を招聘し、木造文化財保存をテーマとしたシンポジウムを開催し、日本が明治以来現在までの文化財修復から得た独自の技術と学術的成果に対する認識を全世界に広め、木造文化財建造物修復の理念を確立し、今後の文化財修理を通じた国際貢献を円滑化する。

ｂ）会議の目的

1)日本建築の代表作である法隆寺、姫路城等の他、京都府・奈良県下の文化財建造物修理現場を視察するとともに、シンポジュウムを開いて意見の交換をはかる。

2)日本の建築文化伝承の特異な実例である伊勢神宮を見学し、日本文化に深い理解を得させる。

3)以上の成果をふまえて委員会を開き、世界中に共通する木造文化財修復の理念等について討議し、１９９６年開催のイコモス総会に報告する資料とする。

②概　要

時　　期：平成６年３月７日（月）～同１２日（土）

場　　所：視察場所　法隆寺、姫路城等の国宝建造物

シンポジュウム開催場所は未定

参　加　者：イコモス木造文化財保存委員会委員１２名

（他一般参加者を含め計３０名）

収支予算額：　2,707,000円

助成希望額：　2,707,000円

③会議の日程（案）

1994年 3月 7日（月）		伊勢神宮見学　外宮、内宮、垣内参拝、神楽奉納
		歓迎会（主催者・日本イコモス国内委員会(予定)）
〃	8日（火）	法隆寺、東大寺、興福寺等見学、修復現場見学
〃	9日（水）	京都市内見学（世界遺産推薦地区、書院・数寄屋造り建築）
		歓迎晩餐会（主催者・京都市）
〃	10日（木）	午前　京都市内修理現場見学
		午後　神戸市　竹中大工道具館見学
〃	11日（金）	午前　姫路城見学
		午後　シポジュウム
		歓迎晩餐会（主催者・姫路市長）
〃	12日（土）	午前　木の委員会
		閉会

④参加予定者

イコモス木造文化財保存特別国際委員会　委員１２名（同夫人３名）

一般参加者　外国から５名　　日本国内から１０名他　　計３０名

⑤東京倶楽部宛助成金申請について

この事業には総額 2,707,000円の経費出費が見込まれる。

現在、社団法人東京倶楽部に助成金の交付を申請中。

4）イコモス国際委員会発行 News Letterの出版援助について

坪井委員長より、懸案であった News Letter　の出版援助の内容が報告された。来年の１９９４年出版分の内の１号分の編集費、約 100万円を日本国内委員会が負担（詳細な金額については後日パリ本部事務局より通知がある）。日本から原稿を寄稿。広告も受け付けるとのこと。原稿執筆は坪井委員長が担当。日本の名所旧跡という特徴的古文化遺産のあり方について言及される予定。

Ⅱ審議事項

1）「イコモス木造文化財保存特別国際委員会」国内視察およびシンポジウム運営について

「イコモス木造文化財保存特別国際委員会」（通称「木の委員会」）国内視察及びシンポジウムの運営は、「木の委員会」の会員である伊藤延男理事及び村上裕道委員が基本的にこれに当たり、必要時に随時国内委員会事務局が応援する。

2）監事役員の件について

現在空席となっている監事について飯田喜四郎委員と吉川需委員に依頼する案が坪井委員長・稲垣副委員長・伊藤理事より提出され、了承を得た。

以　上

（別紙Ｉ）

「イコモス第１０回総会
アジア諸国の人々の出席費援助募金」報告

（募金期間 4/15 ～9/1　１口10,000円　順不同・敬称略）

１０口	坪井清足・伊藤延男	以上２名
５口	佐原　真	以上１名
３口	矢野和之・稲垣栄三・渡辺保弘	以上３名
２口	関野　克・前野　嶌・田中　琢・吉村作治・小寺武久 中村昌生・工藤圭章・渡辺保忠・鈴木嘉吉・金関　恕 牛川喜幸・加藤晋平・狩野　久・半澤重信・石井　昭 岡田英男	以上16名
１口	M．ペーレント・日塔和彦・川嶋一男・藤本　強 中村　一・岡田保良・関口欣也・賀古唯義・陣内秀信 杢　正夫・村松貞次郎・内田祥哉・吉川　需・福本都治 森　宣勝・三浦定俊・上野一邦・片桐正夫・稲葉和也 山本雅治・田村　明・吉田　靖・飯田喜四郎・渡辺定夫 小林達雄・猪熊兼勝・田畑貞寿・田村晃一・田辺征夫 石澤良昭・西村幸夫・河原純之・渡辺勝彦	以上33名

◎応募人数　５５名　募金総数　９９口　９９０，０００円

(別紙 II -a)

ICOMOS 10th General Assembly Colombo 1993

ICOMOS SRI LANKA

Conventions Secretariat, 130, Glennie Street, Colombo 2.
Tel: 94-1-421370/421101-10 Fax: 94-1-449659
Telex: 21389 KEELLS CE

25 July 1993

Professor Akira Ishii,
Treasurer of Japan ICOMOS,

FAX 81 3 3420 6473/81 3 3200 9423

Dear Prof. Akira Ishii,

Thank you for your fax of 23 July 1993, I am giving below the breakdown of the way in which we have allocated the very generous grant that Japan ICOMOS has given us in support of invitees from Asia and Oceania for the Symposium on the *Heritage of Asia and Oceania*.

As you would see the reason for our being unable to support persons from the smaller countries of Asia, who are not members of ICOMOS, is due to the fact that the invitees from the Maldives (Dr. Ahmed Lutfi), Cambodia (Dr. Pich Thean), Nepal, Bangladesh, Malaysia, Indonesia and the Philippines were not able to come or had already found at least partial funding from other sources. We also made every effort to find and invite speakers from Korea, Laos, Bhutan, Brunei and Burma, but were unsuccessful.

Although we were not very successful in some of these efforts, ICOMOS Sri Lanka has been able to play a fundamental role in bringing a very large part of Asia into ICOMOS. Pakistan, Thailand, Indonesia and the Philippines joined ICOMOS within the course of 1993, while you will be very glad to know that China made a formal application to join ICOMOS last morning.

The Symposium on the *Heritage of Asia and Oceania* and the book that is being published in connection with this symposium, will be the first time that ICOMOS is having a meeting and a publication of considerable scientific and intellectual importance on Asia and Oceania.

We are indeed grateful to Japan ICOMOS for the very generous support that you have extended to us, and we hope that the following account of the way the Japan ICOMOS grant has been allocated has the concurrence of your National Committee. The breakdown of

1) the list of invited persons
2) the minute of distributed subsidies

is as follows:

A. PARTICIPANTS FUNDED BY JAPAN ICOMOS

	All costs in	US $
Dr. Rafique Mughal - Pakistan	A	650
8 nights @ 75	H	600
(6 days lunch)		30
	N	200
		1,480
Prof. Fareed Khan - Pakistan	A	925
8 nights @ 75	H	600
(6 days lunch)		30
	N	200
		1,755
Architect Yasmeen Lari - Pakistan	A	530
8 nights @ 75	H	600
(6 days lunch)		30
	N	200
		1,360
Dr. M. K. Dhavalikar - India	A	310
8 nights @ 75	H	600
(6 days lunch)		30
	N	200
		1,140
Architect Romi Khosla - India	A	390
10 nights @ 75	H	750
(8 days lunch)		40
	N	200
		1,380

(別紙 II -c)

		US $
Dr. Nagaraja Rao - India	A	250
8 nights @ 75	H	600
(6 days lunch)		30
	N	200
		1,080
Dr. Chang Qing - China	A	850
9 nights @ 75	H	675
(7 days lunch)		35
	N	200
		1,760
Dr. Truong Quoc Binh - Vietnam	A	850
9 nights @ 75	H	675
(7 days lunch)		35
	N	200
		1,760
Professor Vallibhotama - Thailand	A	565
7 nights @ 75	H	675
(5 days lunch)		25
	N	200
		1,465
Dr. Shaphalya Amatya - Nepal	A	**
7 nights @ 75	H	525
(5 days lunch)		25
	N	200
		750
Dr. Karna Sakya - Nepal	A	**
7 nights @ 75	H	525
(5 days lunch)		25
	N	200
		750

SUB TOTAL = 14,680

（別紙Ⅲ）

日本イコモス国内委員会　会計中間報告　　自1993・2/5 ～至1993・9/8

繰越金

普通預金（口座１）	1,026,394 円	
普通預金（口座２）	1,321,499 円	
小　　計	2,347,893 円	

収　　入

会費収入	570,000 円	
（91年 5名50,000・92年 9名 90,000 ・93年分42名420,00・94年１名10,000）		
普通預金利息	4,562 円	
募　　金	990,000 円	
預 り 金（文化財保護振興財団助成金）	1,410,000 円	
寄　　付	300,000 円	
小　　計	3,274,562 円	
収入合計		5,622,455 円

支　　出

パリ本部への送金（93年分）	312,784 円	
大会援助費（15,000USドル）	1,657,000 円	
預 り 金（文化財保護新興財団助成金）		
470,00円×3 名分	1,410,000 円	
大会参加者渡航援助費（105,000 ×7 名）	735,000 円	
上記振込料	4,738 円	
事務局費（通信・印刷・事務用品他）	168,695 円	
支出合計		4,288,217 円

残　　高

普通預金（口座１）	28,011 円	
普通預金（口座２）	1,264,922 円	
郵便口座	10,000 円	
現　　金	31,305 円	
残高合計		1,334,238 円

基　　金

イコモス研究振興基金	12,550,000 円	12,550,000 円

1993年 8月17日

ローランド・シルヴァ　イコモス会長殿

イコモスの会長に再選されたことを心からお祝い申し上げます。また、第１０回のイコモス総会を盛大に且つ秩序立って立派になしとげられましたことに厚くお礼申し上げます。さらに、この事業に協力された貴国国内委員会のバンダラナヤケ氏以下の皆様にもこころから感謝の意を表明いたします。

我々日本国の参加者一同は、大会終了後のナショナル・ツアーで各地の遺跡を見学し、その遺跡の立派なことおよびその保存に貴国の会員諸氏が献身的に活動しておられることを拝見し、大きな感銘を受けました。ただ Anuradhapura のJatavana Ramaya　大塔の修理現場を拝見したときに日本の参加者全員が、この大塔の修理には幾多の技術上の問題点があり、これについては早急に C.C. のメンバーである伊藤延男博士の意見をとりいれ、貴殿が是非協力な指導力を発揮して万全を期して完全な修理の実現をしていただければ、ということになりました。

大会に際して大変大きな成果を得られたことを御祝申し上げ、深く感謝の意を表します。

日本イコモス国内委員会

委員長　　坪 井 清 足

＊事務局注：上記の手紙を英訳の上、シルヴァ氏に送付いたしました。

ICOMOS

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
CONSEIL INTERNATIONAL DES MONUMENTS ET DES SITES
CONSEJO INTERNACIONAL DE MONUMENTOS Y SITIOS
МЕЖДУНАРОДНЫЙ СОВЕТ ПО ВОПРОСАМ ПАМЯТНИКОВ И ДОСТОПРИМЕЧАТЕЛЬНЫХ МЕСТ

September 29, 1993.

Kiyotari Tuboi Esqr.,
President, ICOMOS
C/o. Bunkazai-Kogaku Kenkyujo
3-9-5-113 Okubo Shunjuku
Tokyo 169, Japan.
Fax: 03-3200-9423

Dear President Kiyotari Tuboi,

Thank you for your letter of 17.8.93. We are sorry that we could not respond to this earlier.

The 10th General Assembly was, indeed, a success consequent to the committed participants on this occasion. The seriousness with which these senior scholars attended the occasion was, indeed, the hallmark of this event. We thank you for the participation and your recognition of success to which you contributed so generously.

We are most grateful to the Japanese National Committee for the fine support and generous contribution to the work of the 10th General Assembly. Without your help, the 10th General Assembly would not have been the success that it has proved to be. We are particularly happy that Asia and Oceania have opend their doors to ICOMOS in a big way and we have in Asia and Océania a fine representation of senior members in the Executive Committee to guide the destinies of ICOMOS International.

We are most grateful to you for your observations regarding the great stupa Jetavanaramaya, Anuradhapura. Dr.N.Ito has been our guide and philosopher in these matters of the UNESCO/Sri Lanka Project of the Cultural Triangle. We will follow your advice and recommendations in continuing to have his support throughout. We have in him and his predecessor, Prof.Shihara, two advisers of high international reputation and we are very lucky to be so privileged.

Thank you again for your congratulations and we look forward to a most fruitful three years of collaborative work when we all can meet again with added success to the ideals of ICOMOS.

With warm personal regards,

Yours very sincerely,

Roland Silva

Dr.Roland Silva
President, ICOMOS
Fax: 94-1-500731

＊事務局注：上記の手紙の日本語訳を次ページに添付いたしました。

ICOMOS - Hôtel Saint Aignan, 75, rue du Temple, 75003 PARIS - Tél.42.77.35.76 - Fax. 42.77.57.42 - TÉLEX 240 918 TRACE F Réf. 617

１９９３年9月２９日

日本イコモス国内委員会
委員長　坪井清足　先生

坪井先生
　８月１７日付けのお便り拝見しました。お返事が遅れましたことをおわび申し上げます。

　第１０回の総会はご出席の皆様のご満足のいくものであったと思っています。ことに先生初め経験豊かな学者の皆様方のご参加によって、今回の大会はひときわ価値あるものとなりました。先生方のご参加と、惜しみないご協力によってこの大会を成功に導いてくださったことに対して心からお礼申し上げます。

　今回の総会のために日本イコモス国内員会が果たしてくださった大きなご支援とご寄付にたいして我々は心からの感謝を述べさせていただきます。この様な協力なしに、今回の大会の成功を考えることは不可能です。この援助によってアジアとオセアニアに門戸が開かれたこと、またそれらの地域から参加された経験豊かな方々が執行委員の中に加えられ、今後のイコモスの国際的役割を共に担う事は非常に意義あることと思われます。

　また、日本の皆様がアヌラダプラのジャタバナ・ラマヤの供養塔を見学して下さりお礼を申し上げます。ことに伊藤先生からこの件に関してユネスコとスリランカの共同プロジェクトへの良きアドバイスがいただける事を喜び、今後先生のご指導を仰いで参ります。

　これからの３年間に実りの豊かな共同作業がなされ、３年後の再会の折にはさらにイコモスの掲げる理想に近ずくものとなるようにと願っています。

イコモス会長
ローランド・シルヴァ

ＩＣＯＭＯＳ第１０回総会

日本イコモス国内員会委員長　坪井　清足

１９９３年7月３０日から8月４日にわたってイコモス第１０回総会がスリランカのコロンボ市のバンダラナイケ記念国際会議場で行われた。これに先立って7月２７日からプレ総会がおこなわれ、その執行委員会に伊藤延男委員が出席され、国際科学委員会に西浦委員とＩＦＬＡ（国際造園家連盟）の杉尾氏が参加された。３０日に始まった総会には伊藤執行委員、坪井国内委員会委員長、同委員の中村　一、西村幸夫、牛川喜幸、上野邦一、益田兼房、西浦忠輝の諸氏及び杉尾氏が参加、渡辺定夫委員は８月２日から参加された。総会は午後４時 D.B.Wijetungaスリランカ大統領到着玄関前記念撮影、玄関ホール入り口の開会燈点火がおこなわれて始まった。会長挨拶にはじまり、大統領祝辞、英国の Sir Bernard Fielden氏にガゾーラ賞授与などが行われた。また、R.シルバ会長から坪井国内委員会委員長に日本の援助のあったことに対しての謝辞があった。午後７時からスリランカの年代記が無言劇で上演され、８時からの Welcome Dinner で終了した。

第２日の３１日は「アジア・オセアニアの文化財」のシンポジュウムが行われ、Session Ⅰで西村幸夫委員による「Historic Sites and Monument in Japan」、Session Ⅲの中村　一委員による「Prehistoric Background of Japanese Rock Gardens 」（近藤公夫委員欠席のためピンチヒッターとして）の報告があり、両者とも好評であった。シンポジュウム終了後、全員で国立博物館の見学が行われた。

８月１日から３日にかけて Archaeological Heritage Management, Cultural Tourism, Conservation Ecomomics の三部会に分かれて発表と討議がおこなわれ、８月１日の午後には古都 Kandyで満月の夜におこなわれるペラヘラ祭の見学、８月３日午後は植民地時代の Galle Fort を見学した。

８月４日午前役員の選挙があり、会長はスリランカの Roland Silva 氏が再選、副会長５名のうち、伊藤延男委員が５５％の支持を得て４位で当選された。他の４名は、米国の CARROLL氏、オーストラリアの DOMICELJA氏、ドミニカの PRIETO 氏、ハンガリーの ROMAN氏である。Secretary General はベルギーの LUXEN氏、Tresurer General はオランダの JESSURUN 氏、新執行委員１２名が発表され、午後決議文の討論、決定（益田氏の報文参照）、１９９６年のブルガリア第１１回総会への招待があり、閉会挨拶の中で、今回の総会に日本ほか各国の支援があったことが報告され、謝辞がのべられ閉会。

８月５日から７日は遺跡見学旅行で、日本からの参加者全員が第三班のバスツアーに参加、ダンブーラ遺跡、アヌラダプーラ遺跡を見学した。

今回の第１０回総会にスリランカのシルバ会長をはじめバンダラナイケ大会委員長および関係者総動員で大会の運営につくされた熱意は大変なもので、あらためて敬意を表するものである。

イコモス副会長当選の経緯について

伊　藤　延　男

この度のイコモス総会において、副会長に選出され、今後３年間、ビューローメンバーとして、イコモスの運営に参画することになった。日本国内委員会の皆様のご支持に感謝するとともに、今後ともよろしくご支援くださるようお願い致したい。

ところで選挙には、常に様々な駆け引きが付きまとうものであるが、イコモスの場合も例外ではなかった。このことは、日本の会員があまりご存じないことのようであるので、私事にわたることにもなるが、選挙の経過をここに報告したい。

イコモスの役員は、会長、事務局長、会計主任各１名、副会長５名、執行委員２０名（うち１５名は選挙、あと５名は会長指名）からなる。改選は立候補者受け付けで始まり、副会長立候補には３ヶ国の推薦を必要とする。私は日本国内委員会の推薦のほか、国内委員会を通じ、米国・ノールウエイの支持を得た。ところが同じ時期に、日本は、オーストラリア国内委員会から Ms.Domicelji の副議長立候補支持を求められた。しかし、すでに私の立候補が決まっている以上、日本が表立って支持することは難しいと、国内委員会の名において断っていただいた。ここから問題がややこしくなってきたようだ。

イコモスには、立候補者リストをあらかじめ審査し、推薦候補に○印を付ける習慣がある。この作業は、去る２月にシドニーで開催された執行委員会でなされ、（伊藤欠席）、結果は、伊藤、Ms.D. とも○となった。ついで６月にパリで開催された執行委員会では、二人が顔を合わせたが、彼女は「あなたがアジア、オセアニアのためにほ本当に努力してくれるならば、自分は立候補を取り下げてもよい。国内委員会の説得に努力する。」と言った。私は決意を表明し、彼女の好意に感謝した。しかし、その後彼女から、国内委員会説得に失敗した旨連絡があり、私は「事前の調整はむしろアンフェア。総会における第１回投票の結果をみてアジアのために妥協しよう。」と返事し、それまでは両国が互いに支持し合おうとの意思表示を、日本国内委員会に表明してもらった。

６月の執行委員会では、フランスからひとつのイコモス改革案が提出された。それは、地域別にイコモスを分割しようという案であった。その真意は図りかねるが、フランス語圏を作りたいということでもあるらしい。となると皆反対で、分けるならばイコムに倣い世界を５つに分け、５人の副会長を地域の統括者にしようという雰囲気に傾いた。そうすると、アジア・オセアニアで１人となるわけである。私は席上、イコモス分割には反対と表明し、後、長老（ルメール氏等）によっても分割案は明確に否定されたが、分割の空気は、今次総会まで燻り続けていたようである。

総会を前にして、７月２７日から開催された執行委員会・諮問委員会では、人事について何事もなく過ぎた。３０日から総会が開かれ、日本からの参加者の皆さんは手分けして私の選挙運動をして下さった。ところが、３日目になった頃から、様

子が少し変になってきた。複数の古い友人が「おまえは降りたのか？日本は遠いので再々パリまで来られないと皆が言うが。執行委員に回るという噂だが。降りてはいかんぞ。」等と心配してくれる。私は、「第１回投票の結果次第では Ms.D.と妥協することもあるが、現在は降りる気持ちはない。副議長としての会議出席は勤務先の神戸芸術工科大学の学長が承認している。当選のうえは私費ででも行く。」と返事したが、さすがに友人達も、ニュースソースまでは明かしてくれないので、手の打ちようがなかった。

第３日目即ち８月１日は、午後からキャンディのペラヘラ祭りを全員で見に行き、コロンボに帰ったのが、午前２時であった。当然全員がクタクタになってしまい、２日午前１０時より諮問委員会が開かれるというアナウンスを聞きもらしてしまった。

私も疲れて、１０時をだいぶ過ぎてから会場へ顔を出すと、友人が「たいへんだ。君の名前の○が消えた。日本から誰も諮問委員会に出ていない。ともかく会場に入れ。」と言う。それから諮問委員会委員である坪井委員長を捜すよう努力したがうまく行かない。再び友人が現れて、「君でよい。すぐ入れ。」と言う。会場に入ると、一旦変更した○印の再変更を求める動議が出されているところであった。動議は、決まってもいない地域割りで○印を変更するのはおかしいということだったが、それは表向きで、実は私の擁護であった。結局○印は、シドニーでの投票通りに戻すことで決着が着いた。

かくして、総会最終日の８月４日の投票で、私は、253 票 55.20％の得票で、５人のうちの４位で副議長に当選した。ちなみに、Ms.D. は 360票68％を得て３位であった。なお、５位は得票が50％に達せず、決戦投票となった。

私は、その日の内に開かれた新役員会で、アジア担当に指名された。責任の重大さを痛感している。

顧みて、私に関しデマまがいの情報を流していた者がどこかにいたことに対し、憤りを感じないわけにはゆかないが、それよりも、これほど私を信頼し、擁護してくれた友人がいたことを嬉しく思い、また過半数の票がとれたことに満足している。いまは実名を言わない方がよいと思うが、擁護してくれた友人は、ヨーロッパ、アジア、南北アメリカに亙っていたことを報告しておきたい。日本国内委員会の皆様のご支援、ご協力も感謝のほかない。しかし、率直に言わせていただくならば、総じて日本人は、かかる会議での駆け引き、いわば修羅場潜りにまだ慣れていない状況にある。

以上、私事ばかりを長々書き連ねたと思われるかもしれないが、決してそうではない。今後３年毎にイコモス役員が入れ替わる。その度に、日本から新しい世代の方々が役員に立候補、当選して頂きたいものである。いや当選すべきだ。その時の参考資料となるようにと、今回のありのままの状況を“歴史”として書き記した次第である。

以　上

スリランカの遺跡保護

奈良女子大
上野邦一

総会が終わり、文化三角地帯へのツァーからコロンボへ帰った後、わたしは滞在予定がさらに四日あったので、アヌラーダプラに再び訪れ、ここに三日間滞在した。アヌラーダプラ市内の遺跡はほぼ全体を見たことになろう。ツァーの時にさえ、遺跡の広がりに驚いていたが、再び行ってみるとツァーの時に訪問したのは遺跡全体から言えば、いわば目ぼしい所だけであったことが分かり、さらに遺跡が広がっているのを確かめると遺跡全体の規模の大きさに愕然とした。数百年の間に造営が継続し、それらが遺跡として重なりあうよりは、次々に広がっていったという印象である。遺跡のうちの主なものには保護の手がうたれ、訪問者が多いが、一方周辺の遺跡は未発掘・未整備である。周辺の遺跡を半日ほど歩いていても、誰にも会わないと言ってよいほど、人が来ない。広い遺跡の中、木立に囲まれて一人でいると、何とも言えぬ孤独感に襲われる、始末である。

遺跡の整備中の様子や整備が終了した建物跡を見ると、作りすぎると思う整備は、あちこちで見かけた。しかし、翻って日本のことを考えると、遺跡の上に復原建物が建ち始めているし、遺跡の上に復原建物を建てる構想は目白押しである。遺跡を専門家だけがわかるのではなく、一般の人々にもわかってもらうには、地上に建物の形状を示すことは避けられず、どの様な論理で整備するかを打ち立てて進めるしか方法が無いと考えるべきで、スリランカでの瞥見から作りすぎるという短絡した非難はたぶん的を得ていまい。

アヌラーダプラ市内には新しい道路が建設されていて、二年ほどここに来なかった運転手は、遺跡と新しい道路との相互関係が分からずにいた。よく見ると新道のかたわらに旧道が通っている。新道路網は、観光のポイントを車で回るのに便利なように設定してある、と思えた。アヌラーダプラはスリランカでは大きい方の都市らしいが、市街地は狭く、とくに産業があるとも思われない。とすれば、広大な遺跡が招く観光客はアヌラーダプラにとっては、人々の生活を支える顧客なのである。そして、そうであれば遺跡の整備は見栄えが良いように、となるのはやむを得ない側面を持つ。遺跡を保護し、一方では遺跡を表示する、そのバランスや考え方を深める必要があろう。総会の分科会の一つが「文化的な観光」をテーマした背景が後になってじっくりと理解できたしだいである。

スリランカ滞在の最後の一日に、旧友であるラルチャンドゥラ氏の案内で、文化三角地帯に含まれていないスリランカ南部で、コロンボの東250kmにあるダムベゴダの遺跡を訪ねた。総会のシンボルマークになっていた観音立像（？）と近辺の遺跡で、高さ１０ｍほどの立像が二体とそれに関連する遺跡と磨崖仏であった。訪問した立像の二体は近年、発掘調査で地中から発見され、修復によって蘇った仏像である。沢山の老若男女が、整備が完了したいわば新しい聖地に足を運んでいた。この国の仏教にたいする熱心さを垣間見た思いがある。

イコモス・スリランカ総会に出席して

牛川　喜幸

７月２９日、予定より５時間半遅れの 20:50福岡空港発で旅行は始まった。私にとってイコモス総会は初めてであり、スリランカもまた初めての地であった。急な出張で準備不足のため、印象に残った断片を記して報告にかえたい。

他の例を知らずに言うのも変だが、今総会がアジアでの初回を意識してか、会を盛り上げようと周到に用意されたことを強く感じた。空港の出迎え、アコモデーション、大統領臨席の開会式、見学地での歓迎体制など、事務局はさぞ大変だったろうと推察され、ご苦労を感謝したい。

シンポジウム初日は坪井委員長が議長席に着き始められた。夫々限られた時間での発表であり、午後の部に入り、印象づけるために工夫をこらす発表が幾つかあったのが注目された。２日目から三部会に分かれての発表となった。３日目午後は KANDY 視察。当日は年に一度のペラヘラ祭。夜に入り、熱気に包まれた町で身近に電飾された象の群れ、楽隊など壮麗な行列をたっぷり楽しむことができた。総会の日程がこの祭に合わせて計画されたものと、この時、納得した。ただしホテル帰着は午前２時半、翌日のシンポは当然の如く予定通りに行われた。

３日目の午後はゴール見学。やはり帰着は真夜中。４日目は選挙。副議長に伊藤先生が選出されたことは大変慶しいことであった。５～７日目は遺跡見学にあてられた。炎暑の中、駆足ではあったが大規模遺跡の調査と修復現場を巡った。一部には仕事を急ぎ過ぎていると見受けられるものもあったが、私には得る所多く、貴重な体験であった。

今回 Pokuna(沐浴池) を数多くみることができた。沐浴池はヒンドゥー寺院にもみられ、イスラムの庭にもひきつがれるが、炎暑の地で Pokuna は欠かせないものであろう。予想以上に規模が大きく、形状、意匠も様々であことが実感できた。Anuradhapra のクッタム・ボクナはすばらしく、また時代は降るが Polonnaruvaのクマラ・ボクナは正方形で中央に円座があり、隣接して建物基壇がの遺されている。北の区域には精巧な八葉、五段の蓮華池がありオーバーフローの装置が設けられている。なかでも Sygiriya 遺跡の規模と、複雑な Water System には圧倒された。私にはまだ充分理解できないが、南の湖を主水源とするらしい導水システム、Sygiriya Rock の西部下方に展開する方池群を結ぶ水系、発掘と修復が行われていた正南部のパビリオンをめぐる小園池群のなかには底に玉石を敷きつめるものも見られ興味深かった。バンダラナイケ氏によれば、中軸線以北は発掘調査も行わず現状保存とのこと、妥当な方針と思われる。

第１０回総会に出席して、各国の研究情況の一端を知ることができ、またスリランカの代表的な世界遺産の実状を、短時間ではあったが大会事務局のご努力で効率よく巡ることができたことは大いに幸せであった。

ギリシャの岩

中村　一

イコモス・スリランカ総会で発表すべく、原稿を用意されていた近藤公夫氏の代理として、急遽、大会に出席することになった。発表のテーマは日本庭園の石組の古代史的背景というものであった。近年、続々と発掘された庭園遺跡から、日本庭園の最も古い石組が姿を現してきた。その一方で、日本庭園の起源については、ますます複雑な問題が生じている。平城京三条二坊六坪のいわゆる宮跡庭園と平城宮東院庭園の石の表現は、大陸風から国風への推移が奈良時代後半にあったことを想像させた。しかし最近出土した城之越の遺跡は、４世紀にさかのぼる祭祀遺跡と推定されており、そこには既に石組の芸術的表現の片鱗が伺える。仏教の伝来以前に、このような石組があったとすれば、これは原始的道教の影響と考えるべきではないか、というのが近藤論文の要旨である。

発表時間が１５分と厳しくきめられていたので、スライドを用いて、論文内容を簡単の紹介するのが精一杯であった。ともかく、役目を果たして、面白そうな研究発表を聞いたり、投票に参加したり、日帰りのツアーを楽しんだりしているうちに日が過ぎて、大会最後の晩餐会がやってきた。この頃には、もうすっかり日本庭園のことは忘れて、スリランカの文化をすこしでも吸収しようと夢中になっており、大会後の国内ツアーを心待ちにしていた。ましてや、日本とスリランカの庭園文化の比較などということは、まったく念頭から離れていた。

ところが、晩餐会の席上で、私に会いたいというスリランカ人の紳士が現れ、ご本人から一通の手紙を渡された。拝見すると、この方は作家兼ジャーナリストのグナセカラさんで、スリランカ考古学協会の準事務局長であった。手紙の内容は、要約すると、４０年ほど前にゴダカウエラというところで、日本の石庭と呼ばれた遺跡が発掘されたこと、その縮小レプリカが当時のコロンボ博物館（現在のコロンボ国立博物館）で展示されたこと、これについてグナセカラさんは数度にわたって記事を書いていること、また、これについて暇があれば議論したいというものであった。これには大いに関心をそそられたが、既に酒がまわって、会場は騒然としていたので、将来、文通して議論しようと言って別れたのである。

正直にところ、スリランカの庭園に、日本庭園のような自然の岩石の芸術的使用を想像するのは、そのは時難しかった。しかし、翌日からの国内ツアーを続けるうちに、内陸部の風景を特徴づける岩山や、岩山を利用した文化遺産群につぎつぎに出会うことになった。なかでもギリシャでは、熱帯の樹海のなかに忽然とそそりたつ巨大な岩山の上の、まさかと思われるような山頂部に、宮殿が造られていた。その山麓には宮園がひろがり、全体としては左右対称の構成のなかに、自然の岩石の巧みな表現を目撃した時、何かじーんと来るような懐しさを覚えた。新たに発掘されていた流れの庭の遺構でも、その一部の池底に敷かれていた自然のごろた石のデザインは日本の敷石に酷似していた。

もう一度スリランカを訪れたい、そしてグナセカラさんとゆっくり話し合ってみたいという気持ちが、帰ってからますます強くなっている。

第１０回スリランカ総会に参加して

西浦　忠輝

筆者は7月２６日にスリランカ入りした。イコモス総会に先立って行われたゲティ保存研究所主催による研究会 Cultural Heritage in Asia and the Pacific : Conservation and Policy に出席するためである。この研究会は１９９１年9月にホノルルで開かれた同名のシンポジウムをフォローする形で計画されたものである。ホノルルでは、アジア、太平洋各国２名ずつの代表に加えて、ＵＳイコモス、ユネスコ等の専門家総勢１００名近くが参加し、日本からはイコモス国内委員会の推薦で伊藤延男先生と筆者が参加したが、今回の研究会は２０名程度の小さな会で、日本からは筆者だけが参加した。円卓を囲んでフリートーキング方式で行われ、遺跡の整備と活用、観光開発と保存、文化遺産に対する意識の向上などが主なテーマであった。アジア・太平洋地域では特に、文化遺産の保存と地域開発の問題とが密接に関係しており、国際協力を進めて行く上で、この点の理解と考察が重要であることが、あらためて認識させられた。

７月３０日の華やかな開会式で始まった第１０回イコモス総会では、３１日のプレナリーセッションのあと、８月１日からはもっぱら Archaeological Heritage Management　部会に出席した。実質２日間に２９件もの発表があり、１件１５分しか与えられなかったため、やや消化不良気味のところもあったが、色々な事例について知ることができたのは、大きな収穫であった。筆者は本部会で、Results of the Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage　の演題により、１９９０年以降毎年行っているアジア文化財保存セミナーについて概略の報告を行った。我が国が行っている国際協力事業について、国際会議等の場で紹介し報告して行くことは、意義のあることと考えている。

さて、この部会のディスカッションの中で、アジアの国から出された大要下記のような意見を、文化遺産の保存およびそのための国際協力を行う上で、重要かつ基本的な問題と考えるので、ここで特に紹介しておきたいと思う。

◎寺院・教会等は現在も地域住民の宗教の中心であり、彼らの日々のいとなみの精神的支柱となっているものである。これら寺院等は、彼らの生活の変化とともに少しずつ形態を変えて来たものであり、それが伝統というものである。従って、これらを歴史的遺産として保存せんがために、現状で固定したり、あるいは古い時代の様式に戻すというのは、極端にいえば、文化財の保存に名を借りた、民族文化の否定ではないか？

◎モヘンジョダロ等の大規模な遺跡の保存には難しい問題が多い。発掘調査等を含めて保存のための理想論は言えるが、現実の問題として、遺跡地域の現状維持す

ら困難な状況である。その中で我々は最大限の努力をし、整備を行って来ている。にもかかわらず、理想論をたてに、我々の仕事の欠点のみを取り上げ否定するのは、我々の努力を踏みにじるものである。相互認識、相互理解の上に、一歩ずつ前向きに解決して行くべきものではないだろうか？

８月４日の役員選挙（伊藤延男先生が副議長に選出された）および５日から７日の文化三角地帯調査ツアーについては、紙面の都合で省略するが、今回のイコモス総会への参加は、筆者にとって極めて有意義であったと確信している。

最後に、今回助成を賜わったイコモス国内委員会、文化財保護振興財団、および現地で種々お世話になった坪井先生、伊藤延男先生はじめ諸先生に感謝申し上げます。

（東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力室長）

イコモス第十回総会に出席して

西村　幸夫

今回の総会には正式に発表された参加者名簿だけでも６３カ国３３０人を数えるという大規模な大会でした。

総会の目玉のひとつとして「アジア・オセアニアの遺産」と題するセッションが中心に据えられ、日本を含む１３カ国１９題の発表が続きました。講演内容はパキスタンのハラッパ都市の考古学的考察からベトナム・フエの保存問題やニュージーランド・マオリ族の生活、日本の中世庭園の復元的研究まで多岐にわたり、文字どおりアジア文化遺産の多様性を体現したものでした。

筆者は日本からの報告として、わが国の文化財保護システムの発展と現況を紹介し、とりわけ日本的な文化遺産として特徴的な「名勝」の考え方について解説しました。名勝は自然環境とその文化的背景とがあわせて評価されているわが国独自の文化財といえるでしょう。近年、文化的な自然景観とでも訳すべきカルチュラル・ランドスケープへの国際的な関心が高まっているところでもあり、わが国の「名勝」概念は少なからぬ参加者の関心を呼んだようです。

また、無形文化財を有形文化財とともに同一の法律のもとに保護をはかっているという現在のシステムも各国の関心を呼んだようです。

会議はこのあと分科会に入り、考古遺跡の管理、文化観光、保存の経済学の三つに分かれ、三日間の議論を行いました。参加者の多くは考古学者や建築専門家など文化遺産保全の専門家であり、議論も石の文化の保全や木造構造物の保存など専門的、技術的なものが多かったようです。なかで文化観光の問題と保存の経済学の問題とが遺跡記念物の今後のあり方について議論を深めてきているのが印象的でした。

一人あたりＧＮＰだけではかるとスリランカは１９８９年現在５００ドルにも満たない開発途上国に分類されてしまいますが、その落ちついた国民性や豊かな自然、圧倒的な遺跡群を含めて考えますと、そこに充足された小宇宙を実感することができます。スリランカに限らずアジアは本来じつに豊饒であり、その豊かさを失わずにいかに経済的な成長を遂げられるかが課題といえます。今回、アジア以外からイコモス総会に参加した多くの人がそのことを実感したと思います。遺跡や記念物の保全と活用という問題はいわゆる先進国だけの問題ではなく、またこうした問題に真剣に取り組むに値する文化遺産がアジアの各地に存在していることを、文字どおり目撃したと思います。

これにともなってベニス憲章に象徴されるイコモスの遺跡・記念物に対する姿勢も万国共通ではなくなってきています。各国のそれぞれに異なった文化的基盤を尊重しつつ、経済的な事情をも考慮にいれて当面の施策がほどこされる必要があります。今回のイコモス総会は欧米先進国の文化財にたいする見方を相対化するひとつのおおきな契機となったのではないかと思います。（なお本文の一部は文化財保護振興財団の機関誌に寄稿したものと重複しています）

第１０回イコモス・スリランカ総会の決議宣言

益田兼房

公式日程最終日の８月４日、最後の締めくくりとして、２１項目からなる総会決議宣言（RESOLUTIONS）が拍手で採択された。各項目末尾の（）内は、原案を提出した国内委員会または個人を示す。事務局は当日会場で宣言案とその背景となる各国国内委員会等が提出した説明資料を配布しており、ほとんどは議論もなく承認された。しかし、いくつかは議論があったので、特に気付いたものについて表題のあとに→印でその概要を示した。一部不明な点もあるがお許し願いたい。

1、イコモスのメンバー各国は、政治的また経済的な状況は別として、互いに文化遺産の保存についての経験や成果をしっかりと交換していこう（ブラジル）。
2、イコモスは、スリランカ当局に対し、本総会の成功を祝し感謝の意を表明する（アメリカ）。
3、次の第１１回総会をソフィアで開催するとのブルガリア国内委員会の招請を受諾する（アメリカ）。
4、カナダの関係当局に対し、イコモスへの財政支援とストーベル事務局長への人件費支援について感謝の意を表する（アメリカ）。
5、オランダ政府に対して、イコモスへの財政支援、財務担当理事と事務局課長を出していただいたことに感謝の意を表明する（アメリカ）。
6、フランス政府に対して、これまでパリにおいてイコモス本部に施設提供されたこと、また今後ベルサイユにおいて施設提供しようとの申し出について、感謝の意を表明する（アメリカ）。
7、今後新たに国内委員会を設置することへ、支持を表明する（アメリカ）。
8、ゲティ保存研究所とゲティ助成事業財団に対し、国際的な計画への支援と本総会への参加が不可能だった人々（ラテンアメリカ・アフリカ・東欧の１７名）への参加資金援助について感謝の意を表明する（アメリカ）。
9、アメリカンエキスプレス財団にたいし、「熱帯の宝物への旅」（アセアン諸国の文化遺産を紹介した美しい図書で、総会で配布）の出版助成について感謝の意を表明する（アメリカ）。
１０、フランス政府が従来非課税であったイコモスのような国際ＮＧＯ団体に対し遡って課税することについて、ユネスコや関係諸ＮＧＯに問題解決への救済かたを呼びかける（アメリカ）。
１１、ユネスコのマヨール事務局長と世界遺産センターに対して、世界遺産条約の重要性認識と効率改善についての支持を表明する（アメリカ）。
１２、全てのＮＧＯに対して、ボスニア・ヘルツェゴビナや他の旧ユーゴスラビアの諸州での文化遺産の破壊を中止させるための世論形成、及びイコモス災害救出援助事業への財政支援や支持を急ぐよう呼びかける（トルコ）。

１３、イコモスは、本総会で承認されたガイドラインに関連して、文化遺産保護研修事業についてのイコモスによる卒業資格認定基準の創設の検討を急ぐこと（ジャマイカ）。

１４、（イコモス規約第９条に定めるところの）イコモス本部の場所を決定する権限を、総会は１９９６年総会までの間、執行委員会に与えること（イコモス執行委員会）。これは、近く本部がベルサイユかどこかに移転させられるため。

１５、スリランカ政府に対して、開催地コロンボの歴史的地区であるフォート地区のこれ以上の破壊を防止し保護する措置を急がせること（イギリス）。

１６、アンコールワットの安全に関して懸念を表明する（タイ・ディスクル殿下）。

１７、イコモスの危機的な財政状況の改善のため、イコモスの会費を、ＯＥＣＤ基準で定める先進工業国については、３０％あげること（ドイツ）。　→オーストラリアやレバノンからの意見がでた。旧社会主義国など、通貨レートが不利で支払不能な国内委員会もあり、深刻な財政状況。３０％アップでも会費は最低基準を示すものとし、各自会員は自主的により高い会費を支払ってもらいたいとの総会アピールをするべき、次の総会ではこの結果をさらにみなおすべき、等の考えもドイツはもっている。経済的に豊かなものの義務としての提案。

１８、Eger原則（不明）を正式に採択し、国際委員会に適用すること（ドイツ）。

１９、イコモスの社会的な力を高めかつ財政基盤を改善するため、各国国内委員会に対して、イコモス規約第６条第２項第３項にある機関会員と維持会員の加入を許すように急がせること（デンマーク・フィンランド・ノールウエイ・スエーデン）。

２０、イコモスはユネスコ世界遺産センターに対して、世界遺産の監視（MONITORING）はその所在国のイコモス国内委員会の責任とするよう働きかけることを勧告する（ペルー）。これにより継続的で効果的な監視ができ、かつ国内委員会に資金が出せる。　→ノールウエイとイギリスの国内委員会は、既に自国政府から国内の世界遺産の監視を委託されている。しかし、監視段階だけでなく、推薦手続き段階でも関与すべき、との意見もあった。ストーベル前事務局長は、全般に世界遺産の保護にイコモス国内委員会が関与を現在より増すほうが良いのは賛成としつつも、監視を各国国内委員会だけの責任にしてしまうのには慎重な考え。今後も要検討、との議論になった。

２１、イコモス、その会長、全ての国内委員会、国際委員会に対して、この１７年間戦争で破壊され続けてきたレバノンの文化遺産について、その保護と監視を支持し、レバノン国内委員会がこれらの遺産を再建復原する努力を支援することを要請する（ジョセフ・ファレス）。

決議宣言提案者をみると、例えばアメリカやドイツはイコモス事務局と連携して大国としての重みをもった発言をしている。日本も応分の役割分担が期待されており、効果的な活動のできる実力をつけなくては、と痛感した次第である。

スリランカ参り

渡辺　定夫

スリランカコロンボは初めて訪れるところである。セイロン紅茶の産地として名高い、といった程度の知識しかないものだから、世界に誇る文化遺産をもち、イコモスの会長がセイロン人であり、アジアで開催される初めての国際会議に最も相応しい国とは考えてもみなかった。コロンボ会議といえば、かつて非同盟諸国の集まりがあって世界に向けて平和のアピールを出し、おおいに気を吐いた、かすかな記憶に残っている。記憶されるべく国際会議を催すことは、今日のような情報社会できわめて重要なことであり、国際感覚がものをいう出来事のようである。そうした観点からみれば、私の参加は国際センスのない人間がたまたま会議に出会った、ということになる。

もっとも、伊藤先生をなんとしてでもイコモス副会長にしなければ、日本の名が廃れるときていたから、貧者の一票といえどもおおいに意味があるなど、自分勝手な屁理屈をこしらえて８月１日日曜日に羽田をたった。コロンボ行は福岡からしか飛ばないものだから、そういうことになった。初めての経験であったので、思いがけない経験もした。遠いコロンボまで出かけるのだから、日本のどこから飛び立っても料金は同じである、と信じていたのであるが、あに図らんや、国内は別料金とのことであった。会社が別の飛行機だから致し方ない。考えてみれば当たり前のことであった。

コロンボには夜中についた。漆黒の闇は久しぶりで、まずは気に入った。さてホテルへどう行くか、案内所がみあたらないのでタクシーをつかまえようと玄関にでた。一台の車が轟音をたてて止まったので、これ幸いとホテルの名前を言い、運賃を聞いてみた。運転手は大変手早く荷物を取り上げ、トランクの中にいれ始めた。運賃が気になっていたものだから、もう一度尋ねてみた。ノーチャージと言っている英語らしい返事が返ってくるだけで、車にのれと手招きばかりしている。周りにタクシーも見当たらないので、結局乗ることにした。運転手は、私達が座席についたとき、達は家内であるが、一枚の紙をみせてくれた。そこには私の氏名らしいものがローマ字で書かれていた。スリランカの人は、その人だけかも知れないが、真面目で規則正しいと思った。その後、各地で経験したことであるが、外にある時計が正確に動いていたことにあわせて、私の印象となった。

当日は世界の代表的祭りの日だった。ペラハラ祭りというらしい。見損なった腹いせもあり、はやばやと寝ることにした。翌日聞いてみたら、参加者がホテルに戻ったのは朝の３時だったそうである。会議とイベントは人をもてなすに最も良い企画である。翌朝ホテルの窓を通して明るいひざしの空と緑濃い街の家並みを眺め、熱い一日を思った。さっそく参加登録のため、迎えのバスで会議場にむかった。会議場は、それは大きなもので、何とも大味の、単に模型を引き伸ばしたような建築

であった。正面に面する道路の向かいに、同じデザインの会館風建築があった。付属施設と思いきや、中国大使館とのこと、会議場は中国の援助で建てられたものであった。かつて、中国が非同盟諸国の盟主として羽振りを利かせていたことを思いだし、ひとり納得がいった。

会議場では、さまざまな英語を聴くことができる。その話し英語から、凡そ何人か見当がつく。こうした英語は、イギリス人にとって方言と受け取られているのだろうか、一度聴いてみたいものであるが、彼らがどんな皮肉を言うか楽しみである。3つのセッションを覗きながら、面白い発表を聴こうとした。このごろの学会発表でもそうであるが、口頭のそれは、参加者平等の原則から、時間制限が厳しいのが普通である。しかし、国際会議となるとなかなかそうは行かない。長々と話す人物が必ずと言ってよいほどいるものである。多少の時間オーバーならともかく、議長泣かせである。しかも、詰まらぬものである場合がおおい。

国際会議のエクスカーションほど楽しいものはない。思うに、このために参加する人はおおいにちがいない。デレゲイトと同伴者それぞれにプログラムを用意し実施するわけだから、事務局は大変である。スリランカの事務局は、最後までそれは見事にやってのけた。いろいろ心配事があるため事前に予定を確認すると、担当ごとに責任範囲があるものだから、一向要領をえない場合がおおい。契約会社の通例であるが、わがくにのように責任範囲が程々あいまいで重なり合っているほうが、不安感は和らぐように思う。しかし、期待が裏切られることがある点、どちらに軍配をあげるべきか、本当のところわからない。とにかく、今回は結果として万事うまくいった。日米構造協議でいつも対立する論点には、こうした問題を背景にしていることが多くありそうである。

訪れた遺跡はすべて立派なものばかりであった。仏教王国の夢の跡とは言え、柱痕、敷石位しかでないわがくにと違って、石と煉瓦の遺跡は迫力がある。そこまでは結構なものであるが、その先となるといささか頸を傾げたくなるときがある。今日でも煉瓦ずみが当たり前に行われているので、こと復元となると、遺跡の上にかつてあったと信じているとおりに、いわば、デザインされてできてしまう。そうしなければ観光者にわからないと言われてみると、なるほどと思ってみたりもする。遺跡整備の難しい点である。また、材料が異なると、復元の程度、遺構の保護にたいする考え方も変わってくるので、遺跡をわかりやすくするといっても、これまた難しい。各遺跡地でなんと記念植樹際が行われた。遺跡破壊にならないかと心配しながら合計９本うえてきた。手伝ってくれたおばさんに１日の発掘手間賃を聞いたところ、８０円の答えが返ってきた。

伊藤副会長はめでたく第１回投票で決まった。ティータイムを利用して知らぬ人とロシア情勢など話していると、ロシアを原点にして相手の国との隔たり方がわかる。これはなかなかうまい選挙情報収集であった。どうやらおおかたの予想を裏切ることなくオフィサー、エクゼクティブが決まった。後味のよい会議であった。